



「戦争は犯罪である」

秀光中等教育学校
仙台育英学園高等学校

校長 加 藤 雄 彦

例年にはない
酷暑が続いた今
夏、大学時代の研
究室の仲間から

恩師が興味深い
メールを受けました。それは「戦争は犯罪である—加藤哲太郎の生涯と思想」(小松隆三著2018年6月25日春秋社)と

小松先生は慶應義塾大学経済学部で社会福祉や労働組合の研究をなさっていましたが、特にニュージーランドの社会政策に造詣が深く、数多くの著書を執筆しました。慶應義塾大学退任後は山形県庄内地方に新設された東北公益文化大学の初代学長にと強く勧められ同大学におけるニュージーランド学を確立する礎を築きました。

同大学の建築に当たっては、仙台育英学

園多賀城校舎を山形の関係者が視察に訪れ、大学の建物や施設のレイアウト等の参考にしたと伺っています。

加えて、新設間もないこともあり、激務で衰弱していないかと恩師の健康を気遣い、何回も酒田を訪れた記憶があります。

そのころの恩師は専門のニュージーランドの社会政策研究をはじめ公益学の研究をしていました。特に山形県民の気質の根底にある社会貢献・公益性を意識した善行の歴史を独特の言い回しをしながら小生に長時間講義して下さりました。

そのような恩師が何故「私は貝になりました」と言つたのです。このB級戦犯たちは絶望の淵に立たされて、ただ死刑を待つだけの一般兵士が多く含まれていました。

この著書の主人公である加藤哲太郎氏もB級戦犯の一人として死の崖っぷちを歩み、家族や支援者のおかげで極刑は免れたものの、二十四歳から四十二歳にいたる十七年間にも及ぶ獄中生活を過ごしたため、夢や希望の大方は果たせず、晩年は何事も中途半端に終わつたという感慨を抱かざるを得ない生涯でした。この長期間のスガモプリズンにおける死刑囚として連合国から受けた劣悪な、時には拷問のような待遇に対

図書館だより

第45号

校 館 印 刷 株 会 社
学 校 教 育 高 等 學 園 書 本
中 英 学 校 光 台 図 書 本 印 刷 所
秀 仙 台

の一つが国内外で行われた軍事裁判、特にB級戦犯に対する判決など考えています。読者の多くは戦犯という言葉を初めて知ったとか、犯罪人だから極刑を含めて厳罰すべきであると思われるはずです。

この戦犯に対する軍事裁判の特徴は、①戦勝国であるアメリカ・オーストラリア・イギリス・フランス・オランダ・中国等の連合国側が一方的に指揮・運営したこと、②戦争の開始や継続に責任のある高い地位にあつたA級戦犯の裁判と比べて、国内外の各地で連合国捕虜の待遇に対する具体的な事犯が注目されたため、戦場や現場近くにいた一般兵士が戦犯に問われやすく、かつ刑が重く科されがちであつたこと、③B級戦犯の多くは人権も主張もまともには認められず、審理の時間や日数が限られ、反論する時間的なゆとりも自由も与えられなかつたことです。このB級戦犯たちは絶望の淵に立たされて、ただ死刑を待つだけの一般兵士が多く含まれていました。

この著書の主人公である加藤哲太郎氏もB級戦犯の一人として死の崖っぷちを歩み、家族や支援者のおかげで極刑は免れたものの、二十四歳から四十二歳にいたる十七年間にも及ぶ獄中生活を過ごしたため、夢や希望の大方は果たせず、晩年は何事も中途半端に終わつたという感慨を抱かざるを得ない生涯でした。この長期間のスガモプリズンにおける死刑囚として連合国から受けた劣悪な、時には拷問のような待遇に対

する不満・鬱憤は想像に余りあるものがあります。

本人に芽生えた心情は1953年に発表した『あれから七年』(光文社)で、「戦争は犯罪である」との主張となつて強調されます。さらに、戦争を開始し、主導した閣僚、政治家、官僚、軍人などの上層部の責任はもちろん、現場で命令に従つて行動した兵士の責任も問いただしています。

いまから七三年前に敗戦した太平洋戦争において全体では三三〇万人余の日本人関係の戦没犠牲者が出てこと、この数字には、これからという若者を含め、どれだけ多くの不幸・絶望を味わなければならぬ般の人たちがいたかということを我々は忘れてはならないのです。この七〇年余の平和と感じる歳月の間には、膨大な軍事予算が積み上げられ、巨額の軍事施設・設備・軍事装備の生産が行われてきました。憲法を改正し、戦争を国際問題の解決の手段に使えるようにしようとする政治陣営の勢力は広がりつつあります。

あの大戦で戦争を繰り返してはならぬと猛省した敗戦国日本は秘密保護法、安全保障法、組織犯罪処罰法改正が短期間で成立し、戦争のできる国、戦争を受け入れる国に変貌しつつあります。これこそ加藤哲太郎が最も危惧した方向なのではないでしょうか。

結びに、2007年第27回全国豊かな海づくり大会(滋賀県で今上天皇が詔まで)で、加藤哲太郎が最も危惧した方向なのでは、として考えて頂きたいと思います。

古きうみに育まれきし種々(くさぐさ)の魚安らかに住みつくを願う

平成三十年度宮城県読書感想文コンクール

部会長賞 対象図書『火花』

又吉直樹 著

「『火花』を読んで」

1T6 室井律音

「僕は天才になりたかった」という一文が、私の心に決定打を放った。平凡でありきたりな表現かもしれない。しかし、物語の世界にどっぷりと浸かっていた私は、それを徳永の心中にある憧憬や嫉妬、恐れといった感情を凝縮した言葉と理解した。そう思うと、涙が堰を切つてあふれた。

徳永の師匠である神谷は純粋に芸人であろうとした。彼は自分が心底面白いと思えることを追求した。そんな神谷の姿に惹かれてか、駆け出しの芸人であつた徳永は、気づけば彼に弟子入りを申し込んでいたのである。そんな場面からこの物語は展開してゆく。少なくとも徳永にとって、神谷は天才であつた。神谷の芸人としての才能や生き方は良くも悪くも徳永にとって新鮮なものであつたし、彼は神谷を理想像として追い続けたことが語られてゐる。『火花』を読み進めるうちに私はそんな徳永に自身の思いを重ねていることに気が付く。それは次のような体验のためでもあつた。

中学校の同級生Kという男子生徒がいたことを覚えている。当時漫画家を志望していた私は、彼の作家としての才能に嫉妬した。特別絵が上手いといふのではない。しかし、彼の描く物語には人を惹きつける力があった。徳永

が神谷を天才と評したように、少なくとも私にとって彼は天才であった。

中学二年のころ、私とKは二人で一冊の同人誌を発表した。別々の作品を同誌に掲載し、どちらがより面白いと評価してもらえるかという単純な興味があつた。読者は同学年の生徒というが、ささやかな規模のものであつたが、やはり負けたくはなかつたので渾身の作品で挑んだ。

結果は意外にも私の作品が大多数の人気を博するという結果に終わつた。意外だと書いたのは、悔しいけれど私自身、彼の作品のほうが数段上手だと認めさせていたからだ。このとき、私は勝負とは純粋な才能だけで決まるものではないことに気が付いた。

『火花』において漫才の面白さが世間に認められたのは、神谷と大林がコンビを組む「あほんだら」ではなく、徳永と山下の「スパークス」のほうであった。では、この結果が才能の優秀に従つたものかといえば、徳永ならばそれを否定するだろう。そのことは、彼が神谷の才能を「不安になるほど突いていた」と感じたことや、神谷の

「でも、それをお伝えなあかんから。そこの努力を怠つたら、自分の面白いと思うことがなかつたことにされるから。」と主張する。誰しも一度は天才を夢見るのではないか。かくいう私もその一人であつた。しかし、天才であるということが、世の中に受け入れられるということは必ずしも一致しない。神谷がそうであつたように、私の同級生のKも自身の才能に対して十分な評価を受けた。

では、そもそも天才とはなんだろうか。狂人であることが、人並み外れて純粋な人であることが、天才たりうる条件であると主張する人がいる。その一方で、あくまで常識の枠に収まつているような天才も確かに存在する。天才に明確な定義というものはないのでないかと思う。しかし、確實に言えることがある。それは、天才であろうと凡人であろうと、結局のところ「人ととの係わりあいの中に存在している」ということだ。徳永は神谷の姿を「自分

の理想を崩さず、世間の観念とも闘う」と表現した。世間の評価から逃げて自己満足に終始するのではない。彼は批判も受け止めたうえで己の道を

征こうともがいたのだ。天才にあこがれた徳永はあらゆる虚飾を排した「純正の面白いでありたかった」としながらも、スパークスの解散に際して「相方が、お客さんが、僕を漫才師にしてくれた」と周囲の人々に感謝している。私は、よく親や兄弟から「人に迷惑をかける天才」と言われる。なんとも不名誉な称号だが、裏を返せば、それだけ多くの人に支えられてきたということだ。本当にありがとう。そして今度は、私が皆を支える番だ。誰かに感謝し感謝されるよう努力する日々が、いつか私を「人の役に立つ天才」に変えるのかもしれない。

平成30年度
「読書賞」ラシック達成者

◆6月～11月に開催された「読書賞」にて、規定の貸出数を達成した方々の人数を発表します。

《宮城野校舎》

ゴールドランク (60冊以上達成)

● 1名…63冊

シルバーランク (30冊以上達成)

● 2名…54冊／36冊

ブロンズランク (20冊以上達成)

● 1名

スタンダードランク (6冊以上達成)

● 27名

**優秀応募作品 対象図書『アメリカひじき・火垂るの墓』
野坂昭如著**

「戦争が語るもの」

「昭和二十年八月十五日」、日本は終戦を迎えた。当時、神戸に住んでいた十六歳の兄、清太、四歳の妹、節子。私が読んだ本『火垂るの墓』は、両親を戦争で亡くし、激動の時代を兄妹二人で生き、短い生涯を終えた悲しい物語である。

私は昨年、長崎の原爆資料館に行つた。長崎と広島は原爆弾が投下された都市で、そこで戦争のことを学びたいと思ったからだ。資料館には当時の写真や遺品などが展示されており、夏だつたのに怖くて寒気がしてくるようだつた。そこには戦争で死んだ人の死体だった。私は最初、それが死体であることが分からなかつた。なぜなら、亡くなつたほとんどの人が、被害部分が大きすぎて人間としての原型をとどめていなかつたからだ。真っ黒に焦げているもの、両手両足や頭部がないもの、火傷のため包帯で全身をまかれているものなど、たつた一つの爆弾で元気だった人たちや都市が一瞬にして壊滅状態になつてしまつたのだ。原子爆弾に限らず、東京や大阪、沖縄、仙台なども大空襲に遭い焼け野原になつた。小説の中でも、清太と節子の家はB-29の三五〇機にも及ぶ編隊の空襲により全焼し、母はその時の大やけどが原因で亡くなつてしまう。実際に私が資料館で見た光景を、清太と節子は目についていたのである。その時の動

「昭和二十年八月十五日」、日本は終戦を迎えた。当時、神戸に住んでいた十六歳の兄、清太、四歳の妹、節子。私が読んだ本『火垂るの墓』は、両親を戦争で亡くし、激動の時代を兄妹二人で生き、短い生涯を終えた悲しい物語である。

二人の気持ちはどのようなものだったのだろう、何を感じたのだろうと想像するが、そこで親戚たちに冷たくあしらわれ、二人は家を出て近くの防空壕で生活することになる。しかし、それは幼い二人にとっては過酷な生活だつた。日に日に食べ物がなくなつていき、栄養失調が進んでいく。

その後、兄妹は親戚の家に預けられるが、そこで親戚たちに冷たくあしらわれ、二人は家を出て近くの防空壕で生活することになる。しかし、それは幼い二人にとっては過酷な生活だつた。日々に食べ物がなくなつていき、栄養失調が進んでいく。

その後、兄妹は親戚の家に預けられ

るが、そこで親戚たちに冷たくあしらわれ、二人は家を出て近くの防空壕で生活することになる。しかし、それは幼い二人にとっては過酷な生活だつた。日々に食べ物がなくなつていき、栄養失調が進んでいく。

その後、兄妹は親戚の家に預けられ

1M1 荒 泰 樹

少しづつ痩せ衰へついに亡くなつてしまふ。また、巡洋艦が全滅したとい

う知らせを聞いた清太は、父の死を少しづつ瘦せ衰へついに亡くなつてしまふ。また、巡洋艦が全滅したとい

う知らせを聞いた清太は、父の死を少しづつ痩せ衰へついに亡くなつてしまふ。また、巡洋艦が全滅したとい

う知らせを聞いた清太は、父の死を少しづつ痩せ衰へついに亡くなつてしまふ。また、巡洋艦が全滅したとい

ゴールドランク (60冊以上達成)
● 1名…67冊

ブロンズランク (20冊以上達成)
● 1名…26冊

10名

今年度の読書賞で獲得したランクは、次年度の読書賞に持ち越されます。ランクが上がるともらえる特典も増えていきます。

多賀城校舎

(100冊以上達成)

■平成30年度 宮城野校舎図書館利用統計

(11月30日現在)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	計
冊数(冊)	193	228	271	297	109	147	298	221	1,764
人数(人)	475	697	782	1,065	319	691	996	1,087	6,112

■平成30年度 多賀城校舎図書館利用統計

(11月30日現在)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	計
冊数(冊)	112	111	189	384	61	114	204	142	1,317
人数(人)	46	57	62	29	6	23	32	50	305

大人になるまでに読んでおきたい この一冊！

～平成最後の年、本の森でかけがえのない出会いを～

『そして誰もいなくなつた』

アガサ・クリスティ

私が英文学に興味をもつ
きっかけになった本です。

秀光中等教育学校
伊藤 沙絵

『国際共通語としての英語』

鳥飼久美子

国際人目指すなら、
読まなきゃ！

仙台育英学園高等学校 特別進学コース
御代 力夫

『TUGUMI』

吉本ばんな

“おまえが好きだ”と言える
彼女がまぶしいです。

図書館司書
浅川 藍

『失踪HOLIDAY』

乙一

初めて小説で
泣いた一冊です。

仙台育英学園高等学校 秀光コース
佐藤 久樹

『片恋』

二葉亭四迷

I love you の訳し方に
感動します。

仙台育英学園高等学校 外国語コース
松崎 希莉

『レインツリーの国』

有川浩

他者を受け入れる
心を見つけました。

仙台育英学園高等学校 フレックスコース
吉田 志保美

『嫌われる勇気』

岸見一郎／古賀史健

「いまここ」で
人生を変えられる本

仙台育英学園高等学校 情報科学コース
野坂 有生

『リドルフとイッパイアッテナ』

斎藤洋

読書が苦手だった私が、
心惹かれた黒猫の物語

仙台育英学園高等学校 技能開発コース
橋本 直樹

『旅人』

湯川秀樹

日本人初のノーベル受賞者。
若き日の苦闘を描く。

仙台育英学園高等学校 英進進学コース
浅沼 一夫

『人生は20代で決まる』 仕事・恋愛・将来設計

メグ・ジェイ／小西敦子 訳

まだ早い？ いえ、すぐ20代です。

秀光(中等教育学校)校長室長
加藤 聖一

今号の特集は、大人への階段を上る皆さんへ贈る「先輩方」からのプレゼントです。平成の時代は、皆さんが生きてからも様々な事が起り、変化し続けた時代でした。加藤理事長先生のお話の通り、戦争という犯罪の種は世界中に潜んでいます。皆さんには、本を通して様々な事を考え、新しい時代を生きてほしいと思います。（浅川）

編集後記